

# 医人伝

つなごう  
医療

## 内視鏡で負担少なくて

腰痛をはじめとした背骨の病

気治療のスペシャリストだ。体への負担を少なくしようと、大きく切開せず、小さな切り口から内視鏡を使って手術する手法を導入。日帰りや一泊二日の入院で帰宅できるのが特徴で、全国から患者が訪れ、年間の手術数は二万件を超える。

四十八床を備える病院と、隣接して運営する「あいち腰痛オペクリニック」を合わせると、計六十七床に。患者は、背骨関係の「三大疾病」とされる椎間板ヘルニア、脊管狭窄症、脊椎圧迫骨折が約九割を占めるという。

椎間板ヘルニアの従来の手術は、背中側を数センチ以上切開し、神経を圧迫する椎間板の突出部を取る。一方、病院で取り組む「経皮的内視鏡下椎間板ヘルニア摘出術(PELD)」は、直径七ミリの内視鏡を使う。加えて四年前、国内で初めて導入した

あいちせぼね病院(愛知県犬山市)

院長

伊藤 全哉さん(47)

「仙骨内視鏡下腰椎ヘルニア摘出術(SELDT)」は、PELDからさらに進化。三ミリの内視鏡と一ミリの小鉗子で突出部を治療する。傷口が小さいため、日帰りの手術が可能という。

従来の手術は一週間の入院が必要があった。「高齢者が一週間ベッドの上にならたら、三割ほど筋力が落ちる」と指摘。そのせいで「腰の痛みは取れても、結局、歩きづらくなるというジレンマがあった」と言う。内視鏡を使う手術は、手法によっては自費診療になるが「短期間で退院できるので筋力も維持

できる」と利点を説明する。

愛知県瀬戸市出身。中学からテニスを続ける。名古屋大医学部でテニス部主将を務めていた四年生の時、腰痛に見舞われ、練習を一カ月ほど休んだ。「それまでは漠然と外科の医師になろうと考えていた。腰痛になったことで、この痛みをコントロールできないかと考えるようになった」と振り返る。そうした経験から、病院では「スポーツ外来」も開設。テニスやボクシングなどのプロ選手の腰や首などの治療にも当たっている。

腰痛に悩んでいる日本人は三千万人に上るとの推定もあり、「国民病」といわれる。「二足歩行をしている以上、腰に負担がかかるのは当然。高齢になると、腰痛が出てくるのは宿命」と強調する。今、直径三ミリの内視鏡を使うのは椎間板の突出部が小さい場合だけ。「より重症のケースにも使えるよう、器具の改良などに取り組んでいきたい」

ヘルニア手術用の内視鏡を手にする伊藤さん



(榎原智康)